

豊後國志 卷之九

大野郡

延喜民部省式郡次。大野を以て第四と為す。今官制第八と為す。弘安凶田牒第六に為す。風土記に曰く、此の郡は悉く皆原野。此れに因り名を大野郡という也。

郷名

郷五 倭名鈔は郷四。曰く田口。曰く大野。曰く緒方。曰く三重。是也。風土記に曰く。郷肆所。而して郷名、皆闕矣。今、五と為すは、世に宇目郷有り。地境最広し。故に之を加う。

大野

凶田牒は莊に作る。

井田

倭名鈔に田口有り。凶田牒に井田有り。けだし後世の改むる所。今、田口は井田郷に在り。是、古名は廢れ、村に存すのみ。

緒方

凶田牒は莊に作る

宇目

旧(ふる)くは三重に属し、村を称す。此の地、皆山境。亦甚だ広し。けだし、後世開墾する所。佐伯氏の族皆邑焉。既に五十余村を部す。称して曰く宇目郷。故に今は之に従う。

三重

凶田牒もまた郷と称す。

莊名

莊一 野津 豊日志に曰く。西寒多神祠は大郡三重に在り。今按ずるに其の旧址、野津寒田に在り。然らば則、野津は旧三重の部内也。凶田牒は野津院に作る。今尚之を称す。けだし古くは城院を設けるの処。猶菊池、由布の類の如し。既に城院を置き、後に遂に分けて一莊と為す。

村里

村四百五十八。村四百五十四、支村四。通計四百五十八村也。

田尾	上野	大塚	北泉	坪井	近地	徳野原	綿田	北平	白木	中熊	堤	神
鉢	梨原	志屋	栗栖	田夫時	鳥屋(とや)	池在	田	館	市	和田	桑原	北
園	向原	古殿	樋口	平井	瀬口	板井迫	朝倉	堀家	志賀	宮迫	瓜生	大
渡	原	津留	両家	矢田	岩上	中角	佐淵	徳尾	小倉木	代三五	相箇迫	
田尾	片島	中野原	郡山	駒方	河南	河北	犬山	小原	大鳥	莊屋	代野原	
門前	平野寺	岡倉	藤浪	妙勝菴	田仲	佐代	木原	藤北	犬山	宮迫	宮原	
府手	高野	高澤	小原	杵箇原	荷小野	畠(旧は尾原という)	朝海	山峯	黒			
岩	貫原	長尾	川面	岩杉	中土師	向田	安藤	田付	下小和田	木浦内	松	
河内	直野	成法師	澤田	師田原	十時	折小野	上園	三木	原	菅田	影之	
木	(菅田の支)	光昌寺										

以上百五村。旧くは大野郷に属す。郷は郡の北に在り。

小切畠	少里	茜	萩尾	高牟礼	牧原	鏡	萩田尾	中道	岡	田原園	漆生	
山久保	倉浪	向野	原田	大木	高畠	柴山	日向久保	新殿	石田	田口	長	
小野	落合	栗箇畠	船木	葛川	千束	黒松	三嶽	杣河内	山野田	宇津尾木		

高津原 山田 柴北 大迫 野尻 長峯 田原 舞田原 眞萱 内河野首 下津尾
以上四十六村。旧くは井田郷に属す。郷は郡の東北に在り。

片箇瀬(上下二村) 炭焼 大久保 草深野 田良原 小宛 知原 枝石 寺原 牧
原 桑津留 辻 平瀬 尻井 梅木 柚木(旧くは鶴口という) 宮畠 冬原(上下
二村) 徳田(上下二村) 飛尾 中尾 木野 牛箇迫 中野 横平 大石 栗生 小
仲尾 谷門 堂内 小原 鶴林 栗林 仲野 上畠(大友諸士の食邑譜を按ずるに枝
石以下三十一邑を直入と為す。けだし、当時尾平より栗林に至り、川を以て郡界と為
し、西は直入と為し、東を大野と為す。 年野 原尻 上自在 軸丸 下自在 馬場
打越 漆生 徳部 牧 柏原 長迫 宗福 柿木 造士 河宇田 知田 野中 小
野 宇田 佐草 中 宮津留 日小田(旧くは小原という) 倉内 柏野 木南切
長小野 泉園 丸小野 大牟礼 広石 鹿屋 徳尾 馬背戸 小畠 犬塚 今山
久土知 上年野 檜原 花木澤 滞迫 左右知 轟 中山 深谷 津留 宇田枝
井崎 菖蒲川(井崎の支) 宮迫 鳥屋 高城 近江(高城の支。註…近郷か) 伏
野 中野 中津牟礼 内平 犬鳴 猪毛 中津留 長尾 大白谷 桑河内 久部
在町

以上百八村。旧くは緒方郷に属す。郷は郡の西に在り。

大牟礼 松箇平(大牟礼の支) 板屋 山出 奥畠 押川(文禄田牒を按ずるに以上
六村、三重郷の内に入る。後に川の以東を以て郷界と為す。 宇目に管す) 坂口 代
葛葉 皿内 奥江 木浦内 西山 藤河内 樫原 中嶽 田原 古屋園 檜野木
小野市 釘戸 上津小野 伏野 酒利 千束 柿木 河尻 田代 蔵小野 笈河内
柳瀬 桑原 小野 芋瀬 市園 川又 塩見園 花木 上河内 下河内 神田 上
爪 見明 大原 内田 長内 菅 総太郎(一に宗太郎に作る) 伏部野 鹿乗 重
岡 田野 長峯 水箇谷

以上五十六村。旧くは宇目郷に属す。郷は郡の南に在り。

下藤 広野 生野 内河野 於牟礼 利野 萩原 黒坂 戸上 長谷 高松 山奥
赤嶺 天手 長小野 篠枝 吉岡 川平 一木 前河内 椎原 白岩 出羽 細枝
奥畠 折立 津留 尾平 谷平 大内河内 山口 檜原 石上 竹脇 田中 入北
小坂 松尾 鷺谷 松谷 山中 小津留 田町 久原 中尾 山田 高寺 深田
羽飛 鬼塚 内山 久知良 内田 赤嶺(上下二村) 市場 肝煎 玉田 川辺 折
入 百枝 法泉菴 西原 田原 宇対瀬 又井 蘆刈 菅生(又、須郷に作る) 森
迫 浅水 宮尾 深野 徳瀬

以上七十三村。旧くは三重郷に属す。郷は郡の東に在り。

西神野 垣河内 遠久原 内平 泊 岩崎 今俵 清水原 中野 岩屋 豊蔵 中
白岩 蕨野 黒土 落谷 野口 竹下 板屋 市 八熊 持田 桐木 持丸 竹辺
迫 才原 田中 水池 溜水 岩瀬 大内 塚田 松尾 笠良木 田良木 福青田
蔵園 備後尾 田平 小屋河 城崎 名塚 田良原 監柏 花原 若山 柴尾 小
切畠 生野原 菅牟礼(一に菅無田に作る) 寺田 中山 日当 寺小路 牧原 波
津久 黍野 木所 長小野 福原 赤迫 筒井 寒田 松原 御霊園 細口 鍋田
久原 田代 池原

以上七十村。旧くは三重郷の内に在り。後に分かれ野津荘と為す。荘は三重郷の東に在り。

租税

五万七千七百六十九石余（凶田牒に曰く、八百七十町）。

疆城

東は海部郡界に至り、西は直入郡に至り、南は日州白杵郡界に至り、北は大分郡界に至る。

広袤

東は天部郡界より宇目郷見明村、西は直入郡界緒方木野村に至る、約十一里余。南は日向国白杵郡界宇目郷西山村より、北は大分郡界大野郷黒岩村に至る、役十三里。

形勝

郊原平遠。百河繚繞。地、方十有余里。本州の一大郡。

路程

按ずるに国府、日向国に至るは古道あり。けだし延喜式の馭馬に出るの叙はこれを穩当とす。勝国以前なおこれに仍る。野史を按ずるに、佐伯惟定、薩兵の去る路を要し大いにこれを敗るは、すなわち是。国府戸次市に至るは二里余り、郡の三重市に至るは六里余り、内山榎嶺を経て小野市に至るは四里。梓嶺に至るは四里余り、又半里、国界の杉に至るは是なり。

海部郡白杵城路

直入郡岡城の南、滑瀬橋、野津荘小切畠村に至るは十里余り（経る所、草深野、下自在二里、長迫、岩戸、三重市三里余り、蘆刈、竹脇、野津市三里余り、池原、小切畠二里）、是海部郡界（白杵荘搔懐村）也。是より白杵城を距つこと二里（通計十二里余）。

海部郡佐伯城路

直入郡岡城の南、滑瀬橋、宇目郷見明村に至るは十一里（経る所、草深野、下自在、佐草三里。伏野、松箇平、奥畠三里。畠返嶺、釘戸、小野市三里。上河内、見明二里）是海部郡界（佐伯荘横川村）也。是より佐伯城を距つこと六里（通計十七里）。

日向延岡城路

直入郡岡城の南、滑瀬橋、宇目郷梓嶺に至るは十四里余り（経る所、滑瀬橋、小野市九里。千束、重岡二里。水箇谷、梓嶺三里余り）是日向国白杵郡界なり。是より延岡城を距つこと（矢戸側を下る）七里余り（通計二十二里。陸路甚だ険し）。

大分郡鶴崎港路

直入郡岡城北、大野郷大塚村、井田郷犬飼巷に至るは七里（経る所、大塚、和田、大鳥、田仲三里。牧原、田口、新殿二里。犬飼二里）是、大分郡界（戸次郷伊予牀村）也。是より鶴崎港を距つこと五里（通計十里）。

山河

鳥屋山 大野郷鳥屋村に在り。神角山と対し立つ。其の根に合う。上に廢城有り。

神角山 大野郷鳥屋村に在り。奇峯疊翠。衆山秀を聚む。最も高きを聖宝嶽という。

次は如意峯という。聖宝法師求聞持法を修め畢んぬ。如意をうずむ。故に名とす。又、観国峯有り。尤も壯觀の処。山半ばに泉を吐く。百尺、簾の如し。

上津山 大野郷片島村に在り。代三五山と相連なる。紫翠鬱蒼。上に祠有り。

代三五山 上津山東北に在り。松樹鬱蒼。

白鹿山 井田郷柴山村に在り。彩翠山を環。下に清泉有り。巨石無數。臥竜の如く伏虎の如し。水激しく咽び鳴く。且つ山溪濶乍ら窄乍ら、勢い齊しからず。名は手取蟹戸という。頗る山水の勝。此の山古くより白鹿を出す。今なお適う有り。日本後記を按じていわく。延暦二十一年[802]八月、豊後国白鹿を献ず。獲たる者は稻五百束を賜ると。けだしここに獲たるか。

尾平山 緒方郷南に在り。日州と壤を接す。山中薑谷蒸籠山等有り。往時、多く銀・銅・錫・鉛産す。廢坑処処にこれ有り。今わずかに錫を出だす。最も精良なり。

大白山 緒方郷大白谷村に在り。山高く樹少なし。白石崔多し。悪土白石多く、焼けば灰と為す。又、水精石英を産す。一窟有り。洞口陝し。内は広く梯を下して入る。内広五間、高さ七間ばかり。内に大石乳柱のごとく有り。下は地に至る。囲み或いは二尺、或いは三尺、小大五六柱。尤も下品。樂に入るべからず。側に祠有り。白山権現を祭るといふ。

傾山 緒方郷の南に在り。山勢最高に峻し。嶺に至るは四里。周廻七里余り。其の登る先、城山の腰を繞(めぐ)る。一山頂を越ゆ。巉崖深谷。山神堂前を過ぐ。溪有り。梅木という。又、梅木の顔突山を渉る。行三百歩。窟有り。広さ方二丈。深さ丈余り。此れを過ぎ、樹石路を塞ぐ。險隘無比。側の叢樹中、躑躅の樹多し。高さみな七、八丈、囲は五、六尺、花満ると暗谷を照らす。又登る一里。満山篠竹。蕃茂して人を没す。前後相呼びて行く。是より巔(いただき)に至る。一里。惟石巖巖として草樹無し。三峯屹立。中峯最も高し。俗に大傾と名す。西、前傾という。東、後ろ傾という。皆巨石層疊。絶壁懸崖。肩西南に竦む。なお人傾き顧るの状の如し。故に名とす。其の最高峰に方石有り。盤の如し。上平にして坐すべし。相伝う、神武天皇東征の初め、諸王子と此れに登り、天地の神を祭ると。故に四皇子峯という。また曰く、神代の古陵と。鵜萱葺不合尊(註…異体字使用のため別字を使用)を葬るの処。神代紀に曰く。日向吾平山の上陵に葬ると。すなわち此れ。西側の一峯、尾平と名す。すなわち吾平転訛するや。山の後ろ日州高千穂峯と密邇。況や上古の地界いまだ分かつ。或いは◆(註…異体字で判読不能)言之。此の山の西は尾平、奥嶽、臺山に接す。南は西山、木浦に連なる。東北は大白、轟の諸山に亘る。けだし郡の鎮めなり。

内口山 轟山 並んで傾山の北に在り。山中洞穴多し。けだし皆廢坑。相伝う、往時此の地は白銀・鉛・錫多く出だす。山中市を為す。数頃の間。居民屋跡、なお存す。且つ古き墳墓多し。今旧坑に入り錫を採る。皆上品。ただし得る所僅僅のみ。

城山 傾山の前に在り。高く且つ広きかな。永祿中[1658-1670]、衛藤下野守鎮常、(ハ)に城(キ)く。

圓山 城山と相對す。草樹蒼然。形は覆盆の如し。故に名とす。

保全寺山 緒方郷片箇瀬村東南に在り。小富士山と列峙す。蒼松鬱茂。中に路有り。枝石に達す。其の東足に寺有り。保全という。故に名とす。

小富士山 緒方郷片箇瀬村に在り。山上は直入大野両郡の界を為す。松樹鬱蒼。上に中川氏の宅兆有り。

垂珠山 緒方郷木野村に在り。蒼松茂密。鬱鬱枝を交わす。

稻積山 緒方郷中津留村に在り。群山連なり接す。其の高きは稻積たり。濃き碧蕭◆(註…さんずいに麗)洗うが如し。其の足数洞有り。大はすなわち七、八尺。内は漸く広し。十余間。穴は下に向き井の如し。浅深を知らず。水満ちて湛。試みに石を投ずれば声有り。触れは激しくして下稍(ようやく)遠し。巖石皆潔白雪の如し。滑り光有り。中は孔公孽多し。乳の如く垂れ下がる。石之を撃つ。大は磬の如し。小は拳

の如し。瑩白玉に似る。けだし又廢坑。

桑原山 宇目郷に在り。傾山の東南に屹立す。高さ稍相伯仲。◆（註・山冠に罪）峩秀拔。三峯峙して立つ。其中峯の巔、豊日の界と為す。麓水有り。又国界と為す。流れ下り矢戸に入る。

西山 宇目郷西山村に在り。山半原に路有り。杉越という。日之奥村に達する、一里。祠有り。杉越神という。豊日の界と為す。

木浦山 宇目郷に在り。最も幽僻。松木平、米原、姥山、茸迫、天狗平、大霧嶽、田近山等諸険有り。皆廢坑。中に坑有り。広さ方二丈余り。深さ目力及ぶ所。六、七之間。此れを過ぎ迂曲。其の極みを知らず。上、水滴る。下、川の如し。外へ流出す。言う、是、昔時坑水を引くの跡と。凡そ錫を出す。寛文前盛りを為す。

奥畠山 宇目郷奥畠村に在り。数山連なり接す。積翠鬱蒼。総じて奥畠山という。

佩楯山 三重郷の東に在り。奇峯峭（けわ）しく立つ。石壁険峻。遠く望むはすなわち削成の如し。後ろは海部と界を為す。

有智山 三重郷の内山村に在り。峯巒秀拔。幻巖有り。綺石を出だす。盆景の具に充つる。

白山 野津荘西神野村に在り。碧峭翠壁。上に洞穴有り。内、祠を安ず。白山権現を祭る。

亀嶽 大野郷中熊村に在り。数山羅列。形は皆、亀の背。故に名とす。けだし其の巔直入大野二郡の界と為す。

小嶽 大野郷梨原村に在り。孤立蒼然。上、神祠有り。

鎧嶽 大野郷高野村に在り。群山拱翠。山極めて峻峻。北を望めば豊府、眼下に在り。故に戸次氏山半に城す。府と為し、之を守る。山北は小原、高沢、杵箇原諸村有り。西は神角の要衝地に連なる。側、叢竹多し。生牢。以て旌竿（はたざお）と為す。其の館址は山下に在り。馬埒なお存す。

三王嶽 井田郷柴北村に在り。峯列三層。幽邃蔚秀。中、廢塙有り。

奥嶽 緒方郷傾山の西に在り。山高く谷多し。其の奇は黒葛谷という。両崖屹立、間、瀑を吐く。高さ数十丈。草樹籠蒙于上。飛流帛の如し。暗谷の下は最も壯觀。其の境幽僻。至る者は稀。

御嶽 緒方郷左右知村に在り。山足は鳥屋、近江（註…近郷か）諸村を跨ぐ。屹立峻嶒。巔の上は断崖絶壁。西南に聳え出す。高さ数百仞。崖上は二段。並上平にして数人坐すべし。名は仙嶽という。その巔、神有り。山神を祭るといふ。

烏嶽 緒方郷に在り。大石、谷門二村を跨ぐ。碧嶂丹崖最も險し。上、廢寨有り。

朝日嶽 宇目郷河尻村に在り。山高く四面絶壁。上、廢寨有り。

梓嶺 宇目郷水箇谷の南に在り。桑原山と相對す。高山長嶺。上、路有り。日之延岡に達す。七里。碑有り。豊日の界を標す。元禄十二年[1699]、定むる所。旧界東下十八町。祠有り。四代明神と称す。また、梓神という。豊之宇目七祠の一。重岡、梓田。けだし其の祭り田なり。其の側、老杉三株有り。地界既に改むるの後。日人之を伐り、跡を滅す。朽根なお存す。いわゆる豊後杉は囲八尋二尺余り、日向杉は囲六尋五尺。其の間、中杉有り。囲二尋三尺。けだし是王者の政、州郡を分かつ。正に疆域にして私に定る所なし。後世、細民界を侵し、姦吏之に依り、両造情偽弁訥相乱るる所の如くなり。

畠返嶺 宇目郷奥畠村の東に在り。山勢峻嶮。迂曲盤、登ること一里余り。下りまた一里余り、官道、岡より佐伯に達す。

揺動石 大野郷白木村に在り。石の大きさ六、七尺。囲相均し。形は圓にして下稜。崖上に孤立す。力を用いても動かさず。但し指頭にて之を推す、稍稍揺れ動く。遂に大いに動く。所在は崖側。宛転じて落つるもまた奇なり。

東葛谷 大野郷近地村に在り。両山の間。石嶂塀の如し。直立百尺。石理皆方裂分析。形は箆筒を積むが如し。大小無数。真に鬼工を出す。

大野川 一に藤原という。直入郡三宅郷より来る。東北行、緒方、大野郷界を分かつ。横郡中を過ぐ。百溪水を控ゆ。大分に至り海に入る。郡の大川。其の源は直入の諸水。十川、東に会す。広瀬という水、崖上より落つ。蝙蝠瀑を名とす。すなわち大野川と為し、炭焼および柏野古城の下を過ぐ。南折れ軸丸の東を経て高雄堡の下を過ぐ。漆生を経て平治川と為し、小牧山の西北を過ぐ。緒方川と合す。沈墮瀑と為り、北、矢田雌沈墮水を受け、東行し岩戸に会す。向野の東南を遶（めぐ）り、北折白鹿山の下を過ぐ。蟹戸川と為る。東北へ流れ、赤嶺川と合う。茜、萩原の二水を導き、柴北水と合う。犬飼川に下る。

緒方川 源は直入郡入田郷の門田水。矢原を経て郡の中尾、枝石の間を経て牧原に至る。徳田川と合し一と為る。原尻、上自在、馬場を過ぎ、徳部に至る。河宇田水を合し、野尻を経て長迫に至る。曲俺北行。小牧古城の東南を遶り、大野水と合流し、沈墮瀑と為る。

河宇田川 源は緒方郷徳尾村の西に出ずる。北へ向き東へ折れ、河宇田の東北を遶り徳部に至り、緒方河に入る。

和田川 源は大野郷北平、白木の間を発す。朝倉の東に至り綿田、徳野原水を引く。朝倉に至り北平水と合い、坪井に至り直入楠山水を導く。板井迫、堀家を経て和田に至る。又、一水有り。鳥屋山中を発し、田夫時、池在、瀬口諸村を経て和田に至る。両水相合い、和田川と為る。東に向き、矢田川と合す。

酒井寺川 源は二つ。俱に大野郷に出ずる。一は岡倉村より門前、荘屋を過ぎ大鳥に至る。一は古殿村を出で、北園、向原の間を経て大鳥に至る。合して酒井寺川と為る。小原を過ぎ、和田川に入る。

矢田川 和田、酒井寺の二水を合わせ流る。小原の南を過ぎ曲折紆余。両家、矢田を経て、田代水を合し雌沈墮と為り、大野川に入る。

田代川 源は大野郷藤浪村の山中に出ずる。代野原の北を遶り東南へ行き、河南、河北の間を過ぎ、郡山の東を経て東南へ行き、矢田川と合す。

宇田枝川 源は緒方郷尾平山に出ずる。上畠を経て中の、栗林に至り、傾山の北溪二流を引き、滞迫、小原、谷門、小中尾、栗生諸村を経て、諸溪の細流を引く。東北へ行き長小野、柏野、日小田、宇田枝を過ぎ、井崎の北に至る。中津牟礼川を合わせ岩戸川に入る。

中津牟礼川 緒方郷大白谷村の南に発し、稻積山の下を遶り、猪毛、犬鳴を経て中津牟礼川と為る。伏野の東に至り、奥畠川を合わせ、北へ流れて岩戸川に入る。

奥畠川 宇目郷奥畠村の東南に出でて代を経て西へ流れ大牟礼、松箇平の北を遶り、伏野の東北に至り、中津牟礼川と合す。

岩戸川 宇田枝、中津牟礼二水を合わせ流る。東北へ行き、岩戸、柿木の東を過ぎ、沈墮下流と会し、東北を指し向野を下る。

茜川 大野郷藤北の衆溪水。宮迫、三木、茜、萩尾を過ぎ、東北に折れ、漆生、長峯、田原の北を経て大野川に入る。

芝北川 二源並び大野郷を出づる。一は黒岩村を出でて安藤の北を遶り、中土師の西南を過ぎ、下赤嶺に至る。一は内山より出でて鬼塚、市場を過ぎ、下赤峯に至る。また一水は羽飛村の南に發し深田に至る。高寺の細流を引き、市場下、赤峯を過ぎ、三水を一と為す。下赤峯、小坂を過ぎ、竹脇に至り、田中の小川を合して徳瀬に至る。上を過ぎ、徳瀬に至る。小坂水を合わせ、北へ行き、大野川に入る。

徳瀬川 三重郷細枝村の山中に發し、屈曲して奥島を遶り、西行して尾原、吉岡、石上を過ぎ、徳瀬に至る。小坂水を合わせ、北へ行き、大野川に入る。

浅水川 三重郷蘆刈村の南を出でて浅水、宮尾を経て、徳瀬水を合す。

野津院川 源は四。皆野津莊に出づる。一は白岩村の北に出でて豊蔵を過ぎ清水原に至る。又垣河内水、西南へ行き清水原に合して一と為る。黒土の東南を遶り持丸、竹下、市を経る。また竹辺水は八熊の西南を遶り市に至りて合う。寺小路を過ぎ牧原の東南を遶り、波津久に至る。南を指し萩原を過ぎ、大野川と合う。

荷小野川 大野郷の神角山の北を發し、高沢、小原を過ぎ、荷小野川と為る。直入に入り今市川と為る。大分に入り、岡倉を過ぎ野津原川と為る、七瀬川と為るはすなわち此の水なり。

蔵小野川 源は宇目郷の神田村に出づる。柿木に到り酒利川と合し、千束に至り伏野水を引き南へ行き花木川と合し、市園を経る。

田代川 宇目郷上津小野村の西北の山中に出づる。釘戸、小野市を経て川尻水を控え、南を指し田代に至る。田原水を導き、蔵小野川と合い、西南へ行き柳瀬の東に至り、中嶽川と合う。

中嶽川 源は三。皆、宇目郷に出づる。一は西山村の山中より、一は木浦内村を出で、一は皿内村の西北を出で、奥江の東に至り、三水合流。中嶽を過ぎ、田代川に入る。

桑原川 宇目郷藤河内村の西南を發し、直東へ行き、田代川と合う。桑原山の下を過ぎて日州に入る。

宗太郎川 源は宇目郷の大原村に發す。南へ行き宗太郎を過ぎ梓嶺、矢嶺の間を経て日州に流れ下り、矢戸川と為る。豊日の界。

沈墮瀑 大野郷矢田村に在り。大野、緒方二川、諸溪水を導き、此に至りて相合し一と為る。懸崖より下、瀑高九丈余り、濶一百余歩、其の潭深測るべからず。崖上危石磊磊尖起。鏝相列す如し。激水急湍衝に触れて其の間を流れ、直垂分かち十三条と為す。遠く之を望めば氷柱列立するが如く、之に近すればすなわち白竜雨を駆け百雷怒り叫び、飛雪虹を吐き、頗る爽快、目を洗うべし。それ夏の霖（ながあめ）、秋の潦。すなわち水溢れて一と為る。銀漢倒瀉。またまた壯觀なり。

雌沈墮瀑 沈墮を相去ること一町ばかりに在り。碧潭相連なり、故に雌を以て之を称す。大野矢田の下流。矢田川という。瀑の高さは十余丈。濶一丈余り。飛流直下、匹練之懸の如し。

轟瀑 井田郷の大迫村に在り。瀑の勢は激しく飛び、鳴泉鱗鱗、衆車の響きの如し。故に轟瀑を名とす。

黒葛瀑 緒方郷傾山の西に在り。奥嶽条下に見る。

原尻瀑 緒方郷の原尻村に在り。直入の門田川、牧原に至りて徳田水を引き、此に至りて崖より流れ落つる。高さ五丈。濶三丈。飛流は簾の如く、瀟洒愛すべし。

蝙蝠瀑 緒方郷の炭焼村に在り。是、直入郡の十川。此に至りて崖上より下る。高さ三丈余り。濶二丈。飛激鳴流れ、白日彩虹を吐く。

酒井 大野郷門前村の醍醐寺の側に在り。大なる車輪の如し。靈亀中、孝女の感致す所、味今なお甘美。

鏡池 大野郷の志賀村、志賀氏宅址の傍らに在り。豎三町、横一町。志賀氏此を宅とす。四時の觀を給い、池辺に松・楓、影を涵す。波面錦を布く。今廢れて僅かに存す。

關梁

犬飼巷 井田郷の下津尾村に在り

三重駅 すなわち三重郷市場村。呼びて三重市という。延喜兵部省式に曰く、馱馬五疋と。

小野駅 宇目郷に在り。古駅にて今は廢るる。呼びて小野市という。延喜兵部省式に曰く、馱馬十疋と。

野津駅 野津莊に在り。今、野津市という。けだし古くは軍団を置く時、馱有り。

市萬田市 大野郷に在り。或いは古駅。今、村を稱す。

岩戸渡 井田郷の向野村に在り。

浮橋 大野郷の大渡村に在り。竹を編んで橋と為す。制、筏の如し。暴溢に備う。

平治橋 緒方郷の平治川に在り。大渡の下流。

原尻橋 緒方郷の原尻村の緒方川に在り。

佐草橋 緒方郷の佐草村の宇田枝川に在り。

土産

鯽魚(ふな) 大野郷大渡村が出だす。大きき皆尺余り。味は美。

白石英 緒方郷轟村及び大白谷が出だす。

石灰 緒方郷大白谷が出だす。

沙参・茯苓・紫根 俱に緒方郷奥嶽村及び宇目郷に出ずる。(註…いづれも漢方

薬。沙参||サジンはセリ科目の多年草ハマボウフウの根を使う。茯苓||ぶくりようはサルノコシカケ科目のマツホド菌を使う。紫根||シコンはムラサキ草の根)

椎茸・石茸 俱に緒方郷奥嶽村が出だす。

農具・木履 俱に緒方郷奥嶽村が出だす。

孔公孽 緒方郷稻積山が出だす。(註…鍾乳管の一部)

錫・鉛・鍾乳 俱に宇目郷木浦山及び緒方郷尾平村が出だす。

悪土・滑石 俱に宇目郷木浦山が出だす。

葛粉・蕨粉・乾蕨・乾薇 俱に宇目郷木浦山が出だす。

蕨索 宇目郷が出だす。

黏 宇目郷が出だす。

熊皮・羚羊皮角 俱に宇目郷が出だす。(註…羚羊はカモシカ)

研石 三重郷内山村、最も性緻密。堪硯と為す。或いは盆景具と為すべし

神祠

志賀神祠 大野郷志賀村に在り。日本紀を按じ稱するに、景行祈る所の三神。志賀神有るは是なり。今若宮八幡と稱す。

深山人幡祠 大野郷和田村に在り。此の祠及び旧上津、浅草を以て大野郷三宗祠と稱す。神亀中[724-729]、祠を建。或いは曰く、天正中[1573-1592]創する所。未だ

詳らかならず。建久[1190-1199]以降、大友氏世祭祀を奉り祠宇を修め、祭田を寄す。其の賜書歴世皆之を蔵す。石華表（註：石の鳥居）応永年[1394-1428]、之を立（）。
旧上津八幡祠 大野郷片島村に在り。社記或いは曰く、天長中[824-834]、叡山金亀和尚由原祠を剽（はじ）むるの後、此に至り一祠を興す。上津八幡と称す。長徳三年[997]十一月、三位大納言頼房、五節の神事を修め命じるの書有り。寿永二年[1183]、緒方惟栄、祠宇を再修す。その後、大友氏、戸次氏世営み修む。且つ神田を寄する。其の書、歴世之を蔵す。石華表有り。刻して曰く、至徳二年[1386]十一月、藤原（註：大友）親世。

浅草八幡祠 大野郷宮迫村の浅草山上に在り。祠の来る由は上に同じ。

祇園祠 大野郷大鳥村に在り。嘉暦元年[1326]、祠を立（）。石鐙有り。題に曰く、正中二年[1325]、願主沙弥道蓮。又石華表、榜（たてふだ）の額。康応元年の字有り。其の地を呼び大鳥という。けだし大鳥居の転訛なり。

天満祠 大野郷門前村酒井寺境内に在り。其の創を知らず。至徳四年[1387]の華表有り。

御霊八幡祠 大野郷宮迫村の浅草山下に在り。建長（註：建久）七年[1198]、大野泰基、大友能直と戦い神角山に敗死。其の霊を祭るといふ。

豊尾明神祠 大野郷河南村に在り。寛永中[1624-1644]、府主中川久盛、片島上津山祠を以て此に移し祭る。遂に片島祠と呼び、旧上津と称す。

鳥嶽祠 大野郷中熊村に在り。すなわち山神を祭る。

俵積権現祠 大野郷綿田山上に在り。其の山、皆石。大きさに、三尺。形は菓包の如く、積み畳みて山を為す。祭神は保食命、倉稻魂命の二神。其の創を知らず。

柴山人幡祠 井田郷柴山村の叢樹中に在り。最古の祠、其の創を知らず。社記妄誕信ずべからず。祠前、百余歩、老杉樹有り。高さ十余丈、囲六尋、相伝神木と為す。

大行事八幡祠 緒方郷今山村に在り。社記に曰く、孝徳天皇の大化元年[645]八月、降臨の徴有り。祠を建つる。木造獸三雙有り。其の一雙は背の記念に題して大化元年某月日。文字漫滅。其の奇古く、信ずべし。又一雙題記に曰く、豊後国緒方今山の大神行事神前、応永三十一年[1424]甲辰秋八月、大願主字以下又読むべからず。又一雙は題書無く、且つ晩近物已。相伝えて曰く、毎歳八、大祭を行う。故に大行事と称すなり。祠の前、古松樹有り。天明二年[1782]、大風が僵（たお）す所、其の下に石函を得たり。中に銅筒有り。長さ四寸、口径二寸。刻字に曰く、大治丙午[126]閏十月、佗漫漶読むべからず。但し、循行友于の四字有り。而して其の筒の中は空。唯有るは塵灰の如き物。けだし之、孝子其の親の追薦のため、仏経を盛る物か。

八幡祠 緒方郷久土知山上に在り。緒方三宗祠の第一。

八幡祠 緒方郷原尻村に在り。緒方第二祠なり。

八幡祠 緒方郷上自在村の山上に在り。緒方第三祠。治承二年[1178]八月、緒方惟栄、此の三祠を建つるといふ。宝暦八年[1758]、商戸有り、此の祠境において正に酒店を営む。地を掘りすなわち銅器及び古刀を得る。刀は朽壞。器はなお全し。題に曰く、永久三年[1115]、僧定、父母へ孝養を為し云云二十余字。中川久貞命じて之を瘞（う）ず（む）ること故の如くし、且つ其の上に碑を建つる。

天満祠・八幡祠 緒方郷片箇瀬村に並び有り。二祠は旧戸次氏の建つる所。元禄元年[1688]、中川久恒、其の祠を改作す。

神明祠 緒方郷広市村に在り。文明中[1469-1487]、降格の瑞有り。豊府主、志賀氏に命じて祠を建て之を祭る。修験宝勝院をして祭事を掌（つかさど）らしむ。嘗て天正

中[1573-1592]、薩兵に賄し、其の害虐を免る。

御霊祠 緒方郷小島村に在り。古祠、其の創を知らず。

御嶽祠 緒方郷左右知村の御嶽山上に在り。一に、行滕権現という。宝徳元年[1449]

八月、大友出羽守親隆、世子となる時、薩州へ行く事有りて、島津氏と戦い、数敗す。すなわち日(註：日向)の行滕山神に祈り、誓いて曰く、勝ちたれば神を封内に祭ると。遂に大いに之を敗る。既に凱旋の日、將に其の地をトせんとすれど未だ決せず。神来格の驗有り。是に於いて祠を立て、之を祭る。けだし行滕の神となすは、国常立尊、彦火火出見尊、少彦名命の三神なり。また為朝の霊を祭り八幡祠と称して其の側に在り。

宇田祠 緒方郷宇田村に在り。大神惟基母、華本姫という。土人祭り以て神となす。其の創詳らかならず。婦女多く安産の祈りを為す。二巖有り。穴水滴り小池に注ぐ。池中、菖蒲有り。毎株行行列を為す。相雜乱せず。種苗の状の如し。以て奇と為す。土人巖穴を指して曰く、昔華本に通うの蛇は此の穴の中に出ずると。妄また甚だしきかな。

嫗祠 緒方郷冬原村に在り。嫗嶽祠の下宮。祭りを望む処なり。およそ上島、尾平、宮津留、処処、往往之有り。里人唯此の祠を以て曰く、老婢の華本に従い此に到りて適死す。故に祠を立つる。又復妄かな。

小松祠 緒方郷徳田村に在り。平内府重盛を祭る故に称す。按ずるに豊前国に其の墓三所有り。けだし恩故の人の立つる所なり。是またその類なり。里人の云うには、小松は華本の婢の名なりと。また死に所に就き祠を立つるなりと。妄誕已。

稻積明神祠 緒方郷中津留村の稻積山下に在り。延暦十七年[798]、国司奏して以て祠を立つる。大山祇神たり。大友氏、世之を祭る。永禄三年[1560]、衛藤大炊介鎮種をして之を修理せしむ。梁上げの記、なお存す。

高鳥屋神祠 宇目郷柳瀬村の山上、木浦山の南、桑原山の北に在り。登ること半里ばかり。其の峯尖鋭削るが如し。熊野三祠を祭る。本宮と称すは其れ柳瀬に在り。那智山と称す。其の一は木浦に在り新宮と称す。神降臨之来るの最も旧きかな。建治元年、大友式部大輔頼泰再修焉。天正中[1573-1592]、祭る二所に分か。

宮尾祠 宇目郷千束村に在り。旧くは重岡大原に在り。大永中[1521-1528]之を創む。治は讒に因り滅する所。冤鬼厲を為す。民懼れて祠を造りて怨霊を祭り、以て之を慰む。宇目、大原、中津留、佐伯に到り往往小祠有り。凡そ二十一処。皆、其の所領となすを以てなり。

天満祠 宇目郷中嶽村に在り。天文十二年[1543]、大友の臣、大神惟房其の祠を再修す。

白鳥祠 宇目郷田野村に在り。今八幡祠と称す日本武尊を祭る。日本紀に曰く、景行天皇の二十七年八月、熊襲復び叛く。皇子小碓尊をつかわし之を討つ。遂に其の將、川上梟師を誅す。而して熊襲悉く平ぐ。此に行き茲に憩息す。後人祠を立て祀る。土人誤りて伝え仲哀天皇と為す。非矣。仲哀は此の尊子。又熊襲を討つの事有り。然車駕未だ此に到らず。

山王祠 三重郷内山村に在り。最古の祠。

八幡祠 三重郷菅生村に在り。承徳二年丁丑[1098]創焉。

市辺田八幡祠 三重郷下赤峯村に在り。建武二年乙亥[1336]。佐伯某、肝付兼重を日州に於いて討つ。利あらず因りて高知尾神に祈り、遂に戦い大いに克つ。其の驗有り。後にすなわち祠此に立つるなり。

西寒多神祠 野津莊寒田村に在り。延喜神祇式に曰く。豊後国大野郡一座。西寒多神社是なり、三代実録に曰く貞観十一年[869]三月、豊後国死位西寒多神、従五位下を授く。今既に荒廢し僅かに一茅宇存す。相伝に云う。応永十五年[1408]三月、大友親世、大分郡植田に祠を移すと。其の地を名づけ寒田と為す。是において旧祠廢るるかな。

八幡祠 野津莊仲山村に在り。建久辛亥[1191]、之に剏(はじ)まる。城州鳩峯神を祭る。

仏寺

神角寺 大野郷鳥屋村の神角寺山上に在り。欽明帝三十一年、新羅国僧某来たり、靈嶽の秀を嘉し、此の山に隱る。巖池有り。夜異光を發す。遂に觀音大士金像を感得し、すなわち宇を結び安んじ奉る。後二百余年、聖宝阿闍梨錫此れに卓し大いに宝殿堂宇を興す。及ぶ子院三十六区。輪奐壯麗嚴か名藍の如し。呼びて海西の高野と称す。その後頻りに兵燹(くいせん)に罹(かか)る。応安中[1368-1375]、大友氏再び六坊を建つ。亦復荒廢す。今東北の二坊存すのみ。

宝福寺 大野郷片島村に在り。天長中[824-834]、叡山金龜和尚が居す。年を経て之久し。また既に廢す。建武中[1334-1336]、広智国師錫を此れに掛け以て其の廢を興す。開山の祖。康安元年[1361]、示寂。天文中[1532-1555]、月底俊公又其の廢を興す。因りて中興の祖となるという。

勝光寺 大野郷藤北木原村に在り。大友家乗(註：家の記録)曰く、貞応二年[1172]十一月、左近将監能直卒し、大野藤北に葬る。嗣子大炊介親秀其の宅兆を営み寺を建てる。勝光寺と名づく。けだし其の法諡なり。延元二年[1337]、戸次氏洛の普門大機禪師を招待し重ねて其の荒を修す。号を改め南陽山とす。旧くは寿永山という。

常忠寺 大野郷藤北村、能直墳墓の側に在り。是また同時に相営む。以て香花の共を取る。

醍醐寺 大野郷門前村に在り。旧名酒井寺。天平勝宝四年[754]、釈正覚此れを經歷し其の酒泉出ざるを觀(み)て以て靈区と為す。一練若を建て名は酒井を以てす。其の後世台教を奉ず。大友家乗を按じて曰く、大炊介親秀第八子を僧となる。名づけて良慶、寛元二年[1244]、此の住職す。天正[1573-1592]以降口々廢す。寛文六年[1666]、府主中川久清之を修復す。碧雲天南老師、此れに遊憩す。遂に今の名に改む。

大恩寺 大野郷板井迫村に在り。日羅開基。永禄中[1558-1570]、志賀道翁営む。其の墓、寺後に在り。

普光寺 大野郷上野村に在り、敏達朝、日羅剏(はじ)むる所という。

最乗寺 大野郷佐代村に在り。慶長八年[1603]、釈誓安を祖と為す。

明尊寺 大野郷田仲村に在り。応永四年[1397]、釈了專之を創(はじ)む。

法盛寺 大野郷田仲村に在り。明応四年[1495]、釈十念堂寺を剏(はじ)む。

西蓮寺 大野郷朝倉村に在り。寛永九年[1632]、南志賀氏族秀朝は本願寺良如上人に謁し薙髮して僧と為し、教圓と号す。請こつて一寺を剏む。すなわち此れなり。

明専寺 大野郷田尾村に在り。万治四年[1661]、釈宗珍之を営む。

有縁寺 大野郷田尾村に在り。明暦中[1655-1658]、僧教専が東本願寺に請い此の寺を剏む。

真納院 大野郷両家村に在り。天正中[1573-1592]、東光坊小倉将軍祠を移す。

蓮華院 大野郷矢田村に在り。寛永十五年[1638]、金藏坊、寺を営む。

聞蔵寺 大野郷小原村に在り。延宝二年[1674]、釈了空、之を興す。

大聖寺 井田郷柴北村に在り。慧日山大聖寺と号す。大友親綱の法諡なり。塔有り。

曰く、長祿二年[1459]。家譜に曰く。大野柴北に葬る。けだし葬所は寺の西北五町余、阿蘇十二祠の林叢中に在り。寺中一塔有り。曰く、開山は不肯禪師、貞和五年[1349]寂。けだし長祿は貞和を相距つこと一百余年。然らばすなわち此の寺は親綱の創(はじ)むる所と為すにあらざ。但し旧号を以て法諡と為すのみ。

松岩寺 井田号黒松村に在り。寛永十一年[1635]、節巖和尚之を興す。

新福寺 井田号原田村に在り。元禄四年[1691]、鳳山和尚之を再修す。

妙覚寺 井田号柴山村の白鹿山に在り。其の創(はじめ)を知らず。宝暦中[1751-1764]、文不黙禪師、其の廢を興す。

無量寺 井田号下津尾村に在り。元禄四年[1691]、鳳山和尚之を再修す。寧叟和尚を開祖と為す。其の年を知らず。

圓行寺 井田郷柴北村に在り。延宝元年[1673]、釈清元、寺を営む。

浄流寺 井田郷眞萱村に在り。延宝二年[1674]、釈正應創。

常満寺 井田郷永峯村に在り。寛永四年[1627]、釈雲海之を興す。

光林寺 井田郷大迫村に在り。尺了鏡、之を創む。

阿西寺 緒方郷軸丸村に在り。敏達朝、日羅(はじ)むる所、大野緒方中、岩屋寺・法乗寺・光巖寺・大禪寺・柏寺有り。今は廢る。普光寺及び此の寺が現存す。以て七処と為す。皆巖石に仏像の刻する有り。通じて日羅の造る所という。按ずるに国史の称する処、日羅は僧にあらず。元亨釈書に抛るとすなわち僧の如し。恐らく別僧日羅なる者有り。未だ詳らかならず。

天徳寺 緒方郷小宛村に在り。文明十五年[1483]、薩人陽嶽和尚、廢寺一堂有り、薬師仏像余を覩て、就きて一字を結び、天徳寺と名づく。

保全寺 緒方郷小宛村に在り。延宝中[1673-1681]、碧雲萬室禪師之を再興す。

大福寺 緒方郷井上村に在り。正保中[1644-1648]、碧雲乾門禪師之を再興す。

普門寺 緒方郷泉園村に在り。寛永十四年[1637]、光路和尚之を建し。

寶生寺 緒方郷宇田枝村に在り。宝徳二年[1450]五月、大友出羽守親隆之を営む。明室禪師居さしむ。寶生寺はまたその法諡なり。

吉祥寺 緒方郷今山村に在り。

東光寺 緒方郷犬塚村に在り。孝徳帝の大化元年[645]、大行事八幡祠今山に建つ。すなわち八院を置き、其の祭祀を掌る。八寺皆廢す。唯此の二寺存す。而して吉祥寺、寛文中、碧雲乾門和尚之を興す。東光寺はまた寛文中、修驗胎蔵院之を興す。今、大徳院と称す。

南林寺 緒方郷小宛村に在り。明暦三年[1657]、釈西生之を創む。

入楽寺 緒方郷上自在村に在り。寛文四年[1664]、釈宗園之を興す。

善照寺 緒方郷馬場村に在り。天和二年[1682]、釈智眞之を(はじ)む。

蓮光寺 緒方郷伏野村に在り。寛文六年[1666]、釈了順営む。以上四寺、皆本願寺門徒。

正蓮寺 宇目郷木浦山に在り。慶長十九年[1614]、釈教了之を創む。

寶勝院 緒方郷広石村に在り。修驗道士。文明中[1469-1487]より歴世広石神明祠の祭事を掌る。

位寶院 緒方郷軸丸村に在り。慶安中[1648-1652]、釈覚延、寺を興す。

大徳院 緒方郷長迫村に在り。元禄十六年[1703]、千光坊之を創む。以上、三寺皆修

験法師なり。

長徳寺 宇目郷小野市村に在り。明暦中[1655-1658]、禿翁和尚之を嘗む。

宗圓寺 宇目郷酒利村に在り。慶長中[1596-1615]、禿翁和尚廢寺を興す。

長昌寺 宇目郷重岡村に在り。正徳二年[1712]、自發首座之を再建す。

蓮城寺 三重郷内山村に在り。敏達帝二年、百濟人の釈蓮城之を創む。眞名野長者の建つる所なり。

淨運寺 三重郷内山村に在り。慶長癸卯[1603]、僧光嘗建つ。光嘗は予州の華族。畠府の主、吉松氏の次子なり。洛智恩に隸す。

丈六寺 三重郷肝煎村に在り。其の始め詳らかならず。天正中[1573-1592]、薩之兵燹（いせん）に罹（かか）る。後、大安和尚廢を修す。月桂に隸す。

広福寺 三重郷松尾村に在り。其の初（はじめ）を知らず。天正中[1573-1592]、島津義久之に據り、堡（とりで）とす。

寶光寺 三重郷久知良村に在り。寛文中[1661-1673]、月桂古峯和尚が建つ。

西蓮寺 三重郷深田村に在り。孝山快養座元が創む。後、古峯和尚が廢を興す。月桂に隸す。

正龍寺 三重郷市場村に在り。永正丁卯[1507]、釈了明此の寺を創む。

了因寺 三重郷宮尾村に在り。佐佐木清綱薙髮し僧となり龍泉と号す。天文中[1532-1555]、すなわち此の寺を創む。

乘蓮寺 三重郷百枝村に在り。慶長中[1596-1615]、僧信念が建つ。以上三寺は皆本願門徒。

普現寺 野津莊板屋村に在り。野津五郎頼宗が創む。正保中[1644-1648]、月桂大安和尚が其の廢を再修す。月桂に隸す。

宗壇寺 野津莊菅無田村に在り。阿弥陀仏像を安置す。僧行基の造る所。甚だ験有り。

正光寺 野津莊名塚村に在り。初め田良木村に在り。天正中[1573-1592]、僧善貞が建つ。

尊形寺 野津莊名塚村に在り。寛永中[1624-1644]、僧擔圓が建つ。以上二寺は西本願門徒。

廢寺

三聖寺 廢址は大野郷田仲村に在り。石仏尚存す。凶田牒に曰く、大野莊三百町は領家三聖寺。

到明寺 廢址は野津莊寺小路村に在り。紀聞曰く、大友義鑑、天文十五年[1546]、精舎を建て田を附す。到名寺を名す。十九年[1560]、小佐井、田口等が義鑑を弑す。後遂に此の地に葬る。以て法諡と為す。

墳墓

大野泰元墓 大野郷鳥屋村の神角山上に在り。

大友能直墓 大野郷藤北村に在り。家乗を按じて曰く、貞応二年[1223]十一月卒す。

藤北常忠寺に葬る。法諡を藤北寺という。能直の墓の側、石塔六七有り。皆、戸次氏の墓なり。

立花貞順墓 大野郷大渡村に在り。家乗を按じて曰く、出羽守頼泰の第十三子、立

花左近将監貞順という。建武中[1334-1336]、南朝の勅を奉じ、尊氏の党を討ち、大渡川に戦死す。墓は川東の樹下に在り。けだし、後世其の族立つる所。題して曰く、

応永二十年[1413]。

志賀道翁墓 大野郷板井迫村の大恩寺の後ろに在り。

大友親綱墓 井田郷柴北村の大聖寺西北五町の阿蘇十二社林叢中に在り。大聖寺中、また一塔有り。刻して曰く、長祿三年[1459]二月。けだし後人の建つる所なり。

広瀬大炊之介墓 井田郷原田村に在り。大炊之介は菊池庶流。題して曰く、慶長十九年[1614]。

衛藤忠長墓 緒方郷大白山下に在り。題して曰く、元龜二年[1571]。其の館址、城山下に在り。墓所を相去ること半里ばかり。

小間弾正忠墓 宇目郷蔵小野村に在り。天正十四年[1586]、豊薩の戦、駒鳴城に死す。此に葬る。

三浦伊賀守墓 宇目郷奥畠村に在り。野史に曰く、三浦出雲守、三浦伊賀守、渡辺大学助、小間弾正忠は宇目四傑という。豊薩の役にて皆戦死す。今は唯二子の墓が存すのみ。

大友義鑑墓 野津荘寺小路村の田間に在り。天文十九年[1550]二月卒す。到明寺に葬る。また法諡と為す。寺、今廢る。

土口蹟

細磯野 大野郷阿志野の此れ風土記に曰く。景行天皇行幸の時、此の亜大、土蜘蛛有り。名、小片鹿奥、小片鹿小見、此れ土蜘蛛二人御膳を為すと擬す。其の獺人の声甚だ謹(かまびす)し。天皇勅して曰く、大囀(あなみす、註：囀は「かまびすしい」と。斯に因り大囀野という。今、細磯野というは訛なり。細磯は一に網磯に作る。今は阿志野に作る。並國音相近し。風土記また曰く、郡の西南に在り。今按ずるに西北に作り当つる。地方較、直入郡朽網郷と壤を接す。すなわち車駕経過の地たり。穩当に似す。

桑原屯倉 日本紀に曰く、安閑帝の二年五月、豊國屯倉六処を置く。桑原屯倉有り。大野郷桑原村に在り。

神角山城 大野郷鳥屋村に在り。建久七年[1197]、大野九郎泰基、之に拠る。戦いて死す。

鎧嶽城 大野郷高野村に在り。山高く且つ広し。峭壁峙立。其の前に城す。戸次氏之を創め、世居焉。道雪入道さらに修飾し之を大きくす。

鳥屋山城 大野郷鳥屋山上に在り。一萬田三河守鑑実此れに城く。また其の館址有り。山下に在り。天正の戦にて島津氏に降る。

一萬田城 大野郷和田村に在り。また小牟礼城と名づく。嶮固の地。一萬田三河守宗慶入道之に拠る。天正の戦、薩州に降る。

烏嶽城 緒方郷大石、谷門二村の間に在り。大友臣の堀相模守紹巾入道が之に拠る。

大白谷城 緒方郷大白谷村に在り。また城山という。衛藤蔵人此に城き、世拠る。

皿内城 宇目郷皿内村に在り。志賀親守此に城く。其の子道際年幼く、天正の戦にて城陥つ。

朝日嶽城 宇目郷河尻村に在り。山高く谷深し。嶮要の地。大友宗麟、柴田遠江守紹安をして此に築かせ、且つ之を守らしむ。紹安恨み有り。私に島津氏に通じ、天正の軍にて義久、紹安をして大分天連城に保たせしむ。

田原寨 大野郷鎧嶽の西北に在り。相伝う、田原左馬助築く所と。後、戸次氏が鎧嶽の支堡と為す。

舞田寨 井田郷田原村に在り。四面絶壁。上、平にして広し。下は蟹戸下川が回る。嶮要抛るべし。大友氏、支城と為す。

加納寨 緒方郷冬原に在り。城主、未だこれ詳らかならず。

悪所内寨 宇目郷重岡村に在り。志賀親次、支寨と為し、其の臣をして之を成(まも)らしむ。

荒打寨 宇目郷上津小野村に在り。また勝賀寨と名づく。小間弾正、薩兵の来るを聞き此を築いて抛る。以て保つ。兵衆せず、遂に敗るる。

菅田堡 大野郷上津山に在り。古城址。其の主を知らず。

山内堡 井田郷栗箇島村に在り。事歴未だ詳らかならず。

柏野堡 緒方郷軸丸村に在り。天正中、島津の衆將軍、之を攻む。軸丸蔵人、其の子大善、土民等二百余人を駆り集め保つ。既にして相謀りて曰く、我兵寡(すくな)く、恐らく克つべからず。請う先ず降りて後、之に報いんと。すなわち使いを遣わし降を請い城を授く。薩兵代わりて之に抛る。岡城相去ること遠からず。親次、之を救わんと欲し、原田、後藤等をして兵三千を率いさしむ。路にて軸丸氏の降るを聞き、戦わずして還る。十五年[1546]、薩の成(まもり)、既に大師將に至らんとするを聞き、懼れて去る。

高雄堡 緒方郷軸丸村に在り。天正十四年[1545]、島津氏の豊に事有るを聞き、大友家士阿南但馬、堀中務、鶴原因幡等相謀り築きて之に抛る。既にして伊集院、白浜、伊知(註：伊地知か)三将来たりて之を攻め大いに戦う。壘壁固からず、遂に敗るる所なり。

小牧堡 緒方郷牧村に在り。此の城の西北は藤原川、東南は緒方川の二水が山下を囲繞す。西南の一方は路有り。嶮しく隘し。要固無双なり。けだし、大友氏支堡なり。天正十四年[1545]冬、薩之將、丸田、矢嚙の二子、攻めて之を抜く。其の成を殺し、代わりて保つ。岡城を相去ること僅か三里ばかり。志賀親次、之を聞き大いに怒り衆千五百を親率し之を撃ち、大いに敗り、之を復す。

御嶽堡 緒方郷左右知村に在り。一名杉城。天正中[1573-1592]、加藤長房之に抛り薩兵と戦う。

駒鳴堡 宇目郷蔵小野村に在り。渡辺大学、小間弾正が保つ。薩兵と戦い、二子並びて戦死す。

市園堡 宇目郷市園村に在り。城主未だ之を聞かず。天正之役にて城を抜く所。

高寺堡 三重郷高寺村の山上に在り。寺有り。高寺という。天正之乱、寺毀ち之を築く。土人等之に抛る。

松尾城 三重郷松尾村に在り。天正丙戌、薩兵之に抛る。

星河堡 野津莊東南に在り。

筒井堡 野津莊筒井村に在り。

大友能直宅址 大野郷藤北村に在り。承久二年[1220]冬、能直將に老い菟裘此に営み居す。後、戸次氏の宅と為す。旧址尚存す。

志賀能郷宅址 大野郷志賀村に在り。

緒方惟栄館址 緒方郷上自在村の田間に在り。塹壕跡存す。

大名臣

大神朝臣良臣 三代実録に曰く、仁和二年[886]二月、外従五位下行肥前介大神朝臣良臣、豊後介と為す。また曰く、三年三月、豊後介外従五位下、大神朝臣良臣従五

位下を授く。是に先、官に向かい披訴す。浄御原天皇壬申の年、伊勢に入るの時、良臣高祖父の三輪君子首、伊勢介と為す。軍に従い功有り。卒後、内小柴位を贈る。古之小紫位は従三位に准ず。然らばすなわち子首子孫、外位を叙すべからず。是に於いて外記を下して考實之。外記申す明云。従三位大神朝臣高市磨呂、従四位上安麻呂、正五位上狛麻呂、兄弟三人之後、皆内位。大神引田朝臣、大神栲田朝臣、大神右朝臣、大神眞神田朝臣等、遠祖同じといえども、派別各異なり、内位を叙すの由に応ずを見ず。之に加え神龜五年〔728〕以て降格有り。諸氏先ず外位を叙す。後、内叙に預かる。良臣姓は大神眞神田朝臣なり。首の後、全雄に至り五位を預かるは無し。今、内品を叙すを請う事は格旨に乖（もと）る。勅して良臣及び故兄全雄外位告身を毀し、徳に内階を賜う。豊日志に曰く。光孝天皇の仁和二年〔886〕、外従五位下前肥前介大神朝臣良臣を以て豊後介に遷任す。以て政跡令聞有り。三年〔887〕三月、特に従五位下を勅授すは是なり。また曰く、五年〔889〕二月、任満ちて職を去る。百姓之を留むるを請う。尋ねて再任す。

大神朝臣庶幾 大神朝臣良臣の子。大野郷の大領と為す。豊日志に曰く、寛平四年〔892〕三月、太宰府の言う、豊後介大神朝臣良臣再任既に満つ。其の職を去るに当たりて百姓惜しみ慕う。其の子、庶幾を留むるを請う。之を許し庶幾を以て大野郡領と為し、外従六位下を授く。遂に世領す。盛衰記を按じて曰く、塩田富人大太夫、けだし庶幾という。大太夫すなわち大神太夫なり。古、郡司というは太夫を称す。なお上野國多胡郡羊太夫の類の如し。けだし庶幾は豊後大神氏の祖なり。速見大神と各別。彼は宇佐神官大神朝臣田麻呂を出す。

土師宿祢諸恒 豊日志に曰く、土師宿祢諸恒は豊後の人。靈龜二年〔716〕、大野郡擬大領と為す。子孫の家貧しく孝女有り。世に聞こゆ。

流寓

源朝臣為朝 保元物語に曰く、六条判官為義の第八子という。為朝、年十四。頗る武力有り。卓犖不羈。父其の朝憲を犯すを恐れ、仁平二年〔1152〕、之を放ち海西に下す。先ず豊之大野郷梨原村に到る。今二豊の間往往、事跡多しといえども、其の崛起之始めを以て此に載す。既にして自ら海西総追捕使と称し諸城を攻め抜き、之を降す。威を九州に振るう。扶桑略記及び百練鈔に曰く、近衛院久寿二年〔1155〕四月三日、源為朝豊後國に居し、宰府を騷擾し、管内を威脅す。抛りて遏与力の輩を禁ずべきの由、宣旨を太宰府に賜る。

藤原朝臣前久 近衛前関白藤原前久、龍山と号す。公卿補任に曰く、永祿十一年〔1568〕十一月、職を罷る。武命に忤（むか）らうなり。天正三年〔1575〕十二月、薩州に下り、居ること二年。帰洛。此のとき便通道、豊を過ぎ遊観す。大野沈墮瀑の歌有り。

人物

眞名野長者 善鳴録に曰く、日本豊州眞名野長者は金三万両を齎（もたら）し、天台山に寄す。けだし福根を植ゆるなり。南嶽慧思大師之を聞き緬長者夙に蘊有るを知る。すなわち連城に命じて赤梅檀千手眼、瑠璃薬師仏像を齎す。東へ渡る。城大洋を踰（こ）え、長者宅に達す。長者城を礼し、深く信敬を發す。すなわち一字を結びて居す。実に敏達帝の二年六月なり。また海部郡深田莊に就き、祇陀、療病、施薬、安養、快樂の五院を創む。紫雲山満月寺と名づく。また大山寺を予州に、般若寺を防州

大圃に建つ。皆、城を以て開祖と為す。按ずるに長者其の名は伝わらず。今、満月寺の廢址は、石崖悉く仏像を刻すこと無数。費また細からず。其の豪富知るべからざるなり。相伝う、長者は女（むすめ）有り。容色絶美。用明帝潜かに龍日、適えて之を聞く。思慕禁ぜず。竊（ひそか）に皇宮を降り、長者に就け、親僕役を取る。長者竟眞龍と為すを知る。恐懼し其の女を献ず。豊中往往、其の遺跡を説く。下りて史伝未だ見ざる所。恐らくは齊野野誤り。

大神惟基

按ずるに、惟基はけだし大野郡の大神朝臣庶幾の子なり。所謂大太夫なり。

惟基は所謂鞆大弥太（あかがり・だいやた）なり。世以て嫗嶽の神の胤と為すものなり。盛衰記に曰く、大太夫それ女有り。名は華本（はなのもと）。容姿艶麗。之を愛しみ後園に居す。人有り。竊に來たり之に通ず。夜すなわち來たり、昼到らず。抛る所を知らず。其の母之に教えて曰く。其の人將に去らんとす。芋を績いで針に貫き、衣に係、芋に隨いて之を覓（もと）めよと。女之に従う。すなわち是旧事紀、姓氏録、所謂大神氏の故事なり。また曰く、之を觀（み）るに、すなわち嫗嶽の窟中、大蛇針に中りて將に死せんとす。既に孕む有り。一男を生む。性健、善く走る。足に鞆多し。名づけて鞆大童と呼ぶ。また、鞆大弥太と名づく。其の蛇すなわち嫗嶽の神なり。余竊に謂れはけだし惟基の祖先の余烈に因む。豪富兄弟。其の子孫慈蔓せしめんと欲す。その土之名山、民の仰ぐ所、嫗嶽の神異に仮り、大神氏の故事に混ぜ、民心威服す。子孫遂に以て口実と為す。是すなわち盛衰記の妖蛇人に姦通する説の起る所なり。後世の其の族、之を徴して家系に作る。実以て嫗嶽神孫と為す。未だかつて知らず。庶幾は有り、大太夫を以て堀川大納言、或いは枇杷左大臣、或いは藤原伊周と為す。豊に一関無しといえども、いやしくも宰府の係有る人、取るに以て大太夫に充つ。其の陀官爵事跡。偽の拙。之を論じ足る者無し。姓氏録に曰く、大神朝臣は素佐能雄命（すさのをのみこと）六世、大國主命の後なり。豊日志に曰く、大神諸族は嫗嶽に事託し愚民を蠱惑す。遂に以て有数郡を掠す。是以て之を視る。大神氏の族は大國主に出ず。すなわち大國主の神孫なり。而して嫗嶽の神孫にはあらざるなり。惟基は大神朝臣庶幾の子。而して妖蛇の子にはあらず。独り姦謀を以て民を驅使する者なり。然りといえども大神の族は惟栄の時すでに之を称す。すなわち其の謬伝はまた尚かな。余聊か其の統脈を論じ、其の誤を質すという。其の譜を按じて言う。惟基は五子有り。嫡は高千穂三田井政次という。次は阿南惟季という。次は植田惟定という。次は大野基平という、次は白杵惟盛というなり。

白杵惟盛

大神惟基の第五子。盛衰記に曰く、大弥太惟基の子にして大弥治惟盛という。惟盛の子、大六惟衡という。惟衡の子、大七惟用という。

緒方惟栄

緒方家系に曰く、白杵大七惟用、五子有り。長、太郎惟長という。早く死す。次に曰く、白杵二郎惟高。東鑑は惟隆に作る。次、緒方三郎惟義という。或いは伊能に作る。東鑑は惟栄に作る。次、佐加（註・佐賀）四郎惟時という。次、賀来五郎惟興という。各其の地を分領し、因みて氏と為す。惟栄特に富盛たり。今、緒方郷に宅址有り。白杵惟隆、緒方惟栄の兄弟なることは事実にして東鑑に顕然。盛衰記等は故に贅ならざるかな。

平時重

尾張権守。大野郷梨原の人なり。野史に曰く、仁平中〔1151-1154〕、源公子為朝豊の梨原に到り、時重の家に寓す。阿蘇平四郎忠國の女を娶る。時重之を資す。

大野泰基

九郎を称す。緒方二郎の従父兄弟。建久七年〔1197〕、大友能直、守護職となる。將に國に就かんとす。緒方諸族最も多く、その逼するを恐れて兵を挙げ路を要し之を伐つ。神角山を保ち戦い、敗れて死す。

衛藤國家 右大臣藤原冬嗣十世の孫。兵衛佐仲頼、職衛府に在りし故、衛藤を称す。仲頼十七世、刑部大丞衛藤國家。右大将家（註：源頼朝）に仕う。建久七年〔1197〕、大友能直、豊府の任に就き、國家之に従う。中津留に居す。

志賀能郷 大友能直の第八子。志賀八郎を称す。能直卒して後、婦人尼となり、深妙と名づく。深妙尼、延応〔1239-1240〕及び文永〔1264-1275〕、其の子姪のために莊田を分賜するの書有り。曰く、大野莊志賀邑は八郎能郷に賜う。因りて居し、且つ氏と為す。

志賀泰朝 能郷の嫡子。豊前八郎を称す。文永十一年〔1274〕、蒙古の将、范文虎等襲来す。九州諸将皆之を拒む。十二年〔1275〕及び弘安四年〔1281〕、頻りに来たる。泰朝数戦功有り。筑前国三桑莊を賞し賜う。

志賀貞朝 凶田牒に曰く、藏人太郎。大友出羽守貞親の猶子となる。因りて貞朝と名づく。家譜に曰く、建武元年〔1334〕、五醍醐帝の宣旨を奉じ処処奔命し戦功有り。三年〔1336〕、岡の天神山の旧壘に就き、改築して移り居す。

大野基直 凶田牒に曰く、大野莊下村。大野太郎基直之を領すと。けだし泰基の後なり。

野津頼宗 大友家譜に曰く、野津五郎頼宗は大炊之介親秀の第五子。弘安中〔1278-1288〕、蒙古の戦いにて功有り。凶田牒に曰く、野津五郎頼宗は野津院六十町を領すは是なり。

戸次重頼 大友家乗を按じて曰く、戸次三郎重頼。大友大炊之介親秀の第二子、戸次重秀という。重秀の第二子が重頼たり。文永八年〔1271〕、博多に蒙古の兵を伐つ功有り。凶田牒に曰く、戸次重頼は大野莊中村七十六町を領すと。

衛藤忠長 藏人を称す。刑部大丞國家の十九世の孫。永祿中〔1558-1576〕、大白谷山に城く。曾孫左京進貞義、下野守鎮常等、大友義鎮に仕え、皆戦功有りという。

戸次鑑連 丹後守を称す。後に薙髪し道雪と号す。大野郷藤北邑の鑑嶽城に居す。元龜二年〔1571〕、筑後の守護として筑前州の立花城に移り居す。此の人、忠誠絶倫、兵を用いること神機果決。古き良将を耻（はじ）むること、其の行う事のごとし。すなわち世の知る所、是以て之を載せず。

一萬田鑑實 三河守鑑實、後薙髪して宗慶と号す。大野郷一萬田邑小牟礼城に居す。鳥屋山城は其の支堡なり。大友家乗を按ずるに、能直の第六子なり。兵衛尉時景という。一萬田を領し、世居し、因みて氏と為すという。

工藤親氏 兵衛四郎を称す。家譜に曰く、武知麻呂十世の孫。時信という。木工頭に任じ、故に工藤を称す。時信六世の孫、祐経という。右大将家に仕う。祐経の次子祐謚、建久中、大友能直に従い、豊府に来る。玄孫祐国は大友行宗の子四郎丸を養い、嗣と為す。是、親氏たり。応永元年〔1394〕十月、大友氏継、親氏に命じて緒方郷上島村に住み、日州高知穂を監す。子孫相襲居す。親氏の七世、親仲は大友親胤の子なり。来たりて工藤氏を継ぐ。故に大友義鎮が命じて族を改め、大友という。

大友親載 尾張守を称す。親仲の子。天正二年〔1575〕、屢（しばしば）薩将伊知地（註：伊地知）丹後守、奥嶽朧箇原に於いて破る。高知穂に至りて嶮要に抛り薩人に備う。是を以て天正丙戌の役、薩兵此の路を歴して豊に入る能わず。けだし五箇瀬より朽網に至るといふ。是以て名誉有り。

仙釈

釈蓮城 善鳴録に曰く、釈蓮城は百済の人なり。少なくて隋国に遊び南嶽慧思大師

に服業す。教観博洽。遂に法緒を續(つ)ぐ。時に日本豊州の眞名野長者有り。金三万両を齎し、天台山に寄す。慧思すなわち城に命じ、観音薬師像を齎す。東へ渡り長者宅に到る。すなわち一字を結ぶ。有智山精舎という。推古帝の二十四年八月十日を以て示寂。

釈聖寶 基亨釈書に曰く、釈聖寶は讃州の人。年十六。眞雅僧正を投じて得度す。三論基興寺の願暁及び圓宗に学ぶ。初め東大寺東坊に鬼有り。衆懼れて居らず。寶請いて住む。鬼出でて争か拒む。寶曾て屈せず。鬼佗所に移り、爾より崇り無し。寶常に修練を好み、名山を経歴す。金峯の嶮、役君の後、榛塞路無し。自ら斧を持ちて開く。此れより苦行者相継ぐこと絶えず。善鳴録に曰く、貞観の初め、寶、豊後如意に到る。厝心靈勝、伽藍を修立す。常に良嶽に登り聞持法を行い求む。頃之平安に帰し醍醐寺を開く。而して顕密二教を演ず。仁和三年、直して伝法阿闍梨の位を賜る。延喜九年[909]四月、普明寺に寝宿す。陽成、宇多両上皇寺に幸して疾を問う。七月六日、遷化す。寿七十八。

大機禪師 善鳴録に曰く、大機禪師、諱は智碩。本州大野郡の人なり。仏印禪師参り、玄機頓明、化州の寶陀を闡(ひらく)。尋ねて第將軍源公鈞旨を受け、世洛の普門を出でて暮齡まで豊の戸次氏の招きに応じ、郡の藤北南陽山勝光寺を開く。化門慈栄。応安四年[1371]十一月六日圓寂。

輔阿闍梨良慶 大友大炊之介親秀の第八子。幼くして聡慧。叡山に登り僧となる。台教を研究す。寛元二年[1244]、郷に還り酒井寺に住む。

起山禪師 善鳴録に曰く、起山禪師、諱は師振。豊の大野の人。文和季年[1356]、東福に寓し藏鑰を典ず。洛の圓通に住む。尋ねて、三聖眞如を徒す。弘く玄化を闡(ひらく)。永徳壬戌[1382]、僧録司普明国師選。及び前関白藤公。大將軍源公鈞命に応じ、東福を出世す。至徳二年[1386]十月、疾に罹り遷化す。

佛燈禪師 善鳴録に曰く、休翁禪師、諱は宗萬。本州大野の人。法を大徳悦谿宗悟禪師に得る。大應國師十一成の孫なり。豊の圓福、筑の宗福を領す。世、大徳寺に瑞す。大永六年[1526]一月寂。年六十四。後柏原帝、大伝仏燈禪師の号を特賜す。

釈宥巖 善鳴録に曰く、僧宥巖、諱は会證。姓は越智。予州の巨族。稲葉氏の子。幼くして脱白。密教を研学す。慶長[1611]辛亥、豊の有智山に到り、錫を駐して廢るるを修す。居るに二十余年、堂宇法器鼎[1630]革まざるなし。遂に中興の祖となる。臼杵府主巖と好有り。故に膏腴を寄せんと欲す。巖辞して曰く、乞を以て自活す。是仏の属する所。吾豈貪を以て意と為さんか。俟之を聞き称ゆ。寛永七年十一月、示寂。年八十三。

月溪禪師 野史に曰く、永祿季年[1570]、東福寺の月溪和尚。丹生城に客となり、宇田枝の寶生寺に寓す。沈墮瀑の詩有り。豊中遊観。居ること十年。興盡して帰る。

烈女

土師氏 豊日志に曰く、土師氏に女有り。其の母、酒を嗜む。家貧しく得る能わず。其の女、百万労苦之を給う。適(たまたま)、一の尨眉(註：ぼうび。白髪交じりの眉毛。「老人」の意)来たりて教えて曰く、其の処、醴泉(註：らいせん。醴はあまざけ)有り。以て之を充つべし。且つ善く齢を延び、疾を療すと。遂に山下に走り之を覓(もと)める。すなわち石罅泉有り。嘗ての味は醇美。大いに喜び、日に汲みて之を供す。郷里頼其の孝徳を感敬す。すなわち今の酒井なり。

阿南氏 野史に曰く。天正の役、阿南但馬守鎮長遽(すみや)かに高尾の嶮に築き、

之に抛る。薩師既に来たり。三戦三敗。尚屈せず。之を攻むること益(ますます)急なり。城兵皆死す。鎮長、刀傷十余。耐えず。兵に杖して退く。女子有り。年十七。之を觀る錯愕慨然して曰く、哀しきかな、府君幾死。婢子藐諸といえども武門の子なり。願わくは寇を撃ち國に殉ぜんことを。父冥土に従い、すなわち兜を擲(つらぬ)き兵を執りて出ずる。衆相見て戯れて曰く、是最もの物なり。將に生け獲り以て我が將に献ぜん。皆兵を棄て飛び来る。女子、長戟を揮いて進む。触る者悉く斃る。既に半ば阪を降る。叫びて曰く、賊、来たれ。躁妄の兒輩、群嘩侮慢。また將に之を擒とせんとすと。斬る所の者、殆ど数十。遂に城楼に登り、刃を呑み顛墜して死す。

文苑

沈墮瀑

近衛前関白前久

奴能毘岐乎 (ぬのひきをを)

波多知安萬利乎 (はたちあまりを)

加佐奴斗母 (かさぬとも)

不毛登耳奈利奴 (ふもとになりぬ)

登与久爾乃多幾 (とよくにのたき)